

得した生命だったろうか。彼が自己認識により獲得したのは、主観の中で語る客観をみる自我であった。Geistの流入で変容する自我は全我 All Ich になるのである。しかし、かつての自我は個我として残されている。低次の自我と高次の自我が存在することになる。主観の中の客観も決して融合はしない。つまりすべては分化され、細分化され、独立し、それが有機的に繋がりにあつているといふ構図なのである。これらすべてを行ふのは上位にいる Geist なのである。その Geist から保障されることで人間が神化されるという図式がみてとれる。Geist はどこまでも人間の外にある。神聖なる精神世界 Geist を信奉する宗教性がシュタイナーの思想を貫いているのである。

井筒俊彦の神秘主義論とその意味構造

澤 井 義 次

イスラーム哲学と東洋思想の世界的な碩学として知られた井筒俊彦は、晩年に「東洋哲学」の構築を目指した。今回の発表では、井筒が哲学的思惟の基底をなすと捉えた神秘主義に注目し、彼の神秘主義論の意味構造を考察してみたい。

まず、井筒が「神秘主義」をどのように考えていたのかを明らかにしておきたい。彼にとって神秘主義とは「日常的存在体験を超えた次元での存在体験」であった。意識の深層を拓くことで、はじめて存在の深層を把握できる。したがって、自らそれを体験したことの無い人には理解させることができない。と

ころが、人間はどうしても言詮不及なものを知解によって論考し言語化しようとする。このように井筒は哲学的思惟と神秘主義が「互いに断ちがたい宿命のきずな」によって固く結ばれていると説き、神秘主義の本質的特徴として、神秘主義的な存在体験と哲学的思惟の融合、根源的な結びつきを考えた。神秘主義に関するこうした理解の仕方は、本質的に彼の初期の著書『神秘哲学』(一九四九年)から遺著『意識の形而上学』(一九九三年)に至るまで変わることがなかった。

井筒は神秘主義を次の二類型に分けた。それらは有神論的(あるいは人格神的)な神秘主義と無神論的(あるいは非人格神的)な神秘主義である。こうした彼の神秘主義理解はルードルフ・オットーが説いた神秘主義の二類型、すなわち「神の神秘主義」(Gottesmystik)と「魂の神秘主義」(Seelenmystik)に対応する。井筒はオットーの神秘主義論に言及しながら、これら二類型の神秘主義は対蹠的にもみえるが、本質的に同じで優劣はないと言う。意識を多層的構造体としてモデル化し、表層意識から深層意識への広がりの中で捉えた井筒は、これら二類型の神秘主義が同じ意味論的構造をもつと考えた。

また彼は神秘主義の主要な特徴として次の三点を挙げた。第一の特徴は、経験的世界(リアリティ)が多層的構造をなすという点である。「現実」と呼ばれるリアリティは垂直的方向に広がって、存在領域の多層的構造をなしている。第二の特徴として、彼は意識の多層的構造を挙げた。この点は神秘主義の名に相応しい特徴であるが、人間の意識はリアリティと同じ多層構造をもつという。意識は表層から最深層に及ぶ垂直に重なる

領域の広がりをもっており、しかも意識の多層とリアリティの多層のあいだには、一対一の対応関係が成り立つと井筒は考えた。さらに第三の特徴として、彼は意識の深化のための方法的組織的な修行の存在を挙げた。意識の深層を開くための修行として、彼は坐禅やヨーガなどに注目した。このように井筒は、存在の深みを含む多層的構造こそが真の「現実」であるとし、井筒「東洋哲学」の構築をめざして、神秘主義の構造を意味論的に論じた。

彼によれば、言語は元来、「意味分節」を本源的機能とする。「現実」は無数の語(コトバ)によって現象する意味の網目構造をなす。ところが言語は、形而上学的思惟の極限(「意識と存在のゼロ・ポイント」)に位置する神秘主義的な存在体験について、その意味指示的有効性を喪失する。「意識と存在のゼロ・ポイント」において、「形而上学的なるもの」それ自体は絶対無分節かつコトバ以前である。しかし、哲学的思惟は井筒「東洋哲学」の視座からみれば、絶対的意味無分節たる「形而上学的なるもの」それ自体を「全存在界の窮極の始点(アルケル)」としながら意味分節的なりアリティを言説しようとする。それはまさに井筒のいう「神秘哲学」として、神秘主義的な存在体験のロゴス化であると同時に、言語意味論的な世界観学としての言語哲学であった。つまり、井筒「東洋哲学」は神秘主義を哲学的思惟の始点(アルケル)として、その哲学の基盤へと組み込むことによって、神秘主義と哲学の本質構造的連関を意味論的に明らかにしたと言えるであろう。

第六部会

『雑阿毘曇心論』業品における
無間業の最大罪と最大果について

智谷公和

『雑阿毘曇心論』(Samyuktābhidharma-śāstra, 大正蔵経 No. 1552, 以下『雑心論』と略す)業品(Karma-nirdeśa)における、無間業の最大罪と最大果が説かれている偈と長行は、一七一偈とその長行である。それらの偈と長行は、大正蔵経二八卷八九九頁中段一一行から下段五行までである。

この偈と長行を取り上げることによって、無間業の最大罪と最大果について論述していきたい。論述方法は、『雑心論』と玄奘訳『俱舍論』や、この漢本に相応するプラダン本の梵文を参照し、『称友疏』等を対比させて、また、『順正理論』も参考にしながら、無間業の最大罪と最大果について、述べていくものである。

『雑心論』の無間業における最大罪と最大果が説かれている一七一偈は、「妄語もて僧を破壊はかいするは、諸の業に於て最悪なり。第一有中への思は、是を最大の果と説く。」これを一七一偈とその長行を参照して解釈してみれば、「妄語(misā-vada)によって僧が教団を破壊するのは、もろもろの業において最も重罪(mahā-sāvadya)である。善(subha)の業について第